

防衛医科大学医学部医学科 2025 年度入試「小論文」(2024 年 10 月 19 日実施)

<問題>

設問 以下の文章を読んで、生命倫理について、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

タイの首都バンコク中心部の高層ビルに入る医療機関スペリアー・エーアールティー。平日の昼過ぎ、6 組の夫婦が深刻な面持ちで順番を待っていた。国籍はタイ、インド、中国、欧州。重い貧血を起こす遺伝性疾患「サラセミア」に苦しむ子供を助けたいとの思いで、世界中から足を運ぶ。

10 万人に 1 人という難病を治すには、骨髄などに含まれる造血幹細胞の移植しかない。移植に適したドナー（提供者）を見つけるのは容易ではない。両親が望みをかけるのは、体外受精で「救世主きょうだい」と呼ぶ弟か妹を誕生させ、幹細胞のドナーにするこの病院だ。既に 13 人の救世主が産まれた。

命の選別に論争

タイ北部のランブーン県で暮らすダララットさん（39）は 6 年半前、夫のスパキットさん（51）と相談し、ドナーとなる第 2 子を産む決断をした。「どうしても長男を救いたかった」とダララットさんは語る。

弟のマーティンくん（5）が産まれたのは 19 年。幹細胞移植により兄のマジョーくん（9）の疾患は完治した。「治療がなければマジョーくんは 5～10 年ほどで亡くなっていただろう」。取り組んできたコストス・パパドポロス博士は意義を強調する。

「僕はお兄ちゃんのスーパーマンだね」。救世主きょうだいとして産まれた事実を両親から告げられたとき、マーティンくんはそう答えたという。

体外受精で数十個の胚からマーティンくんが選ばれたのは、免疫の型が合うからだ。適合しなかった胚は処分された。命の選別とも受け取られる治療には異論もある。誰かの役に立たなくても命は存在するだけで尊い、という生命倫理とも相いれない。日本ではこの治療は認められていない。

ヒトの臓器工場はブタ

肝臓や心臓を移植する治療が始まってから約 60 年。ドナー不足から治療を待ち続ける人はなお多い。生体移植では健康なドナーの体にメスを入れるという医療倫理の問題もある。それならばとブタをヒトの「臓器工場」にする研究も進む。

2 月に関東近郊で産まれたのは、日本で初めてヒトへの臓器移植を目標につくられたクローンブタだ。見た目は普通のブタと変わらないが「移植時の拒絶反応やウイルス感染を防ぐために遺伝子を改変した」

（明治大学の長嶋比呂志専任教授）。

ブタはヒトと臓器の大きさが似ており、移植に最適な動物と考えられている。ヒトへの応用を見据え、8 月以降に産まれる別のブタの腎臓と心臓、膵臓（すいぞう）をサルに移植する。人工透析を受ける腎臓病患者は日本に 35 万人いるが、移植例は年 2000 人ほど。移植を待つ期間は 15 年程度と長い。

動物の臓器をヒトに移植する「異種移植」を初めて試みたのは 20 世紀初頭とされる。1964 年には米国でチンパンジーの心臓を移植したが、患者は術後 1 時間で死亡したという。人類は拒絶反応や異種のウイルス感染などの課題をひとつひとつ乗り越えてきた。

米メリーランド大学は 22～23 年、末期の心臓病を患う 2 人に、遺伝子を改変したブタの心臓を移植した。患者は術後 6 週間～2 カ月、命を永らえた。日本でもブタの臓器を移植する複数の臨床研究が数年以内に始まる見通しだ。

ヒトはブタなどの動物を食べ、命をつないできた。臓器も使える技術を人類が手に入れば、多くの患者の福音となると同時に、生命倫理を巡る議論も呼ぶ。生きるとはどれほど利己的なのか。テクノロジーは人類に根源的な問いを突きつける。

(日本経済新聞 2024 年 6 月 19 日)

<解答例>

サンプル A

生命倫理の問題において、技術の進展は人類に大きな可能性と困難な問いをもたらしている。救世主義者による治療と異種移植は、生命の尊厳と医療の限界の間での選択を迫る代表的な事例である。まず、救世主義者による誕生では、生命が「目的のための手段」として扱われる点が倫理的な論争を引き起こす。たとえドナーとして生まれた子供が自分の役割を前向きに受け入れたとしても、彼が「選ばれた」背景には、他の胚が処分されるという命の選別がある。命はその存在だけで価値があるとする生命倫理の原則と矛盾するため、この治療法は慎重な判断を要する。

一方、異種移植は、動物の命を人間の延命のために使う技術である。ヒトへの臓器移植を目的としてクローンブタが作られ、将来的に多くの命を救う可能性があるが、ここにも倫理的な問題が潜む。動物の犠牲を許容することで、どこまで人間の生命を優先すべきかという問いが浮上する。人間のために他の生物を利用することの限界を見極めなければならない。

これらの問題に共通するのは、医療技術が進歩するほど、人類は生命の在り方を問い直す必要があるという点である。技術が可能だからといって全てを許容するのではなく、倫理的な配慮と慎重な判断を欠かしてはならない。命の尊厳と医療の進展のバランスを見極め、人間社会としての在り方を常に問い続ける姿勢が求められる。

サンプル B

生命倫理の問題において、私は「命の尊厳は存在するだけで価値がある」という立場を基本に据える。しかし、医療が人間の生命を救う目的を持つ以上、その尊厳をどこまで譲歩できるかについて慎重に考える必要がある。技術の進歩により、私たちは命を選別したり、動物の命を利用したりする選択に直面する。この選択において私は、命が他者の利益のために道具化されることに強い懸念を抱く。

まず、救世主義者による誕生については、個人の生命が「他者の救済」という目的のために選別され、誕生するという事実を倫理的に正当化することは困難である。たとえ誕生した子供が役割を受け入れたとしても、その選択の背景には処分された他の胚の命がある。この「命の選別」は、命が無条件に尊重されるべきだとする私の価値観と矛盾する。したがって、私はこの手法を人間の倫理的な限界を超えたものだと判断する。医療の目的は命を救うことであるが、それが他者の命の犠牲を前提にしてはならない。

次に、異種移植については、動物の命を人間のために利用することは倫理的に複雑であるが、一定の条件のもとで許容されると考える。なぜなら、医療は利他性に基づき、苦しむ患者に対して可能な限りの治療を提供する責務があるからだ。しかし、動物の命を単なる「資源」として扱うことは避けなければならない。技術が進歩するからといって、無制限に動物を利用することは倫理的に不適切である。そのため、異種移植を行う際には、動物の福祉に十分配慮し、不要な苦痛を与えないよう法規制を整えることが必要である。

私の生命倫理観は、命が尊厳を持つ存在であるという信念に基づいている。しかし、現実社会では理想を貫くだけでは解決できない課題がある。だからこそ、私は倫理的な理想と医療の現実の狭間でバランスを取りながら判断を下すべきだと考える。技術の進歩に伴う新たな問題に直面するたび、私たちは一つひとつの選択に対して倫理的な責任を果たし続けなければならない。

サンプル C

私の生命倫理観は「医療の目的は可能な限り多くの命を救うこと」という功利主義的な視点に基づく。生命の価値は平等であるべきだが、現実には限られた医療資源の中で優先順位をつけなければならない場面が多い。そのため、最も多くの利益をもたらす選択が倫理的に許されると考える。

まず、救世主きょうだいの誕生に関しては、両親が苦悩の末に選択した手段であることを重く受け止めるべきである。命の選別という問題があるにせよ、既に存在する兄を救うことが最優先された結果として受け入れられる面がある。仮にこの治療が認められなければ、重病を抱えた子供は適切な治療を受けられないまま命を失う可能性が高い。命の選別に対する批判は理解できるが、医療の目的は現実的に存在する患者を救うことにあり、兄弟の出生を肯定する選択もまた倫理的に正当化できると私は考える。

次に、異種移植については、ドナー不足という現実的な課題に対応する有力な手段であると評価する。人間は動物を食料として利用する一方で、医療のために臓器を使用することを倫理的に拒むのは一貫性に欠ける。技術が進歩し、動物の福祉に配慮した上で苦痛を最小限に抑えられるのであれば、異種移植は人類にとって有益である。35 万人もの腎臓病患者が人工透析を受ける中、わずか 2000 人しか移植を受けられない現状を放置するのは、医療の責任を放棄するに等しい。

もちろん、これらの手段は倫理的な葛藤を伴うが、私は「最も多くの命を救うこと」が医療の優先事項であるべきだと信じる。すべての命を平等に尊重することが理想ではあるが、現実の医療ではトレードオフが避けられない。そのため、私は一つの命が他者の命を救うために利用されることを必要悪として受け入れ、多くの人に利益をもたらす選択を支持する。命の尊厳と医療の実務の間で葛藤しながらも、最善の結果を追求することが、私たちに求められる倫理的責任であると考えている。

<解説>

1. 出題の意図

この小論文の出題意図は、受験生が生命倫理に対する自身の考えを的確に表現できるかを問うものである。生命倫理は、医療技術の進歩とともに直面する複雑な倫理的課題を多く含んでおり、絶対的な正解が存在しない領域である。このため、受験生には次の3点が求められていると考えられる：

- (1) **価値観や倫理観の提示**：自分の考えや判断基準（物差し）を明確にすること。
- (2) **医療と人間社会の葛藤への理解**：医療行為に伴う選択やトレードオフを把握すること。
- (3) **論理的な構成力と説得力**：感情論ではなく、論理的かつ具体的な根拠で議論を展開すること。

2. 設問の把握

与えられた文章には、「救世主きょうだい」や「異種移植」という、いずれも医療の現場で議論的になる事例が紹介されている。これらは「命の選別」や「他者の命の利用」を巡る倫理的な問題を含んでおり、受験生にとって次のような問いかけが内在している。

- ・ **命の選別**：選ばれた命と選ばれなかった命の価値をどう評価するか。
- ・ **利用される命**：兄弟や動物がドナーとして使われることは倫理的に許されるか。
- ・ **人間のテクノロジーの限界**：命を救う手段の拡大が新たな倫理的課題を生むのではないか。

この設問は、こうした複雑なテーマを理解し、自分なりの倫理観を示しながら解答することが求められている。

3. 解答のポイント

解答の評価は、「理解力」「独自性」「論理性」「表現力」という4つの観点で行われることが予想される。それぞれの観点を踏まえ、効果的な解答のポイントを以下に示す。

- ・ **理解力**：与えられた事例を正確に理解し、論点を外さずに解答することが重要である。単に「命の選別は悪い」「救命は素晴らしい」といった表面的な意見に終始するのではなく、具体的な医療技術の意味やトレードオフの構造を把握していることを示す必要がある。
- ・ **独自性**：自身の価値判断（物差し）を明示することが、他の受験生との差別化につながる。たとえば、「人間の命は絶対に選別されるべきではない」「功利的な判断も必要な場合がある」など、どのような視点から議論を展開するかが評価される。具体的なエピソードや関連する知識を引用できると、さらに独自性が強まる。
- ・ **論理性**：感情的な判断ではなく、論理的な理由づけが求められる。「なぜそう考えるのか」を具体的な根拠に基づき示し、整合性のある議論を展開することが重要だ。起承転結を意識し、冒頭で提示した自分の立場が最後まで一貫するよう心がけるべきである。
- ・ **表現力**：600字という制限の中で、簡潔かつ的確に自分の意見を表現する力が求められる。抽象的な表現に頼りすぎず、具体例を用いてわかりやすい文章を構成することが望ましい。また、「である調」や論文的な語彙を用いることで、説得力を高めることも有効である。

4. 参考事項の解説

(1) 生命倫理におけるトレードオフ

生命倫理の議論においては、「命の尊厳」と「医療の実用性」の間で葛藤が生まれやすい。たとえば、「救世主きょうだい」の事例では、1人の命を救うために別の命が手段として利用されている。このような選択は、医学的には正当化できても、倫理的には賛否が分かれる問題である。

(2) 異種移植と動物利用の倫理

動物の臓器を移植する「異種移植」は、技術的には大きな可能性を秘めているが、動物の権利や福祉に関する議論も避けて通れない。また、ドナー不足を解消するために人間と動物の境界線をどう引くかという、社会的な合意形成の難しさもある。こうした新たな医療技術は、単なる科学の進歩ではなく、人間社会の倫理観を問い直す契機となる。

(3) 命の選別と医療現場の現実

命を平等に尊重することが理想である一方で、医療の現場では限られたリソースの中で命の選別をせざるを得ない現実がある。これに対して「医療の最大の目的は命を救うこと」という功利的な視点を支持するか、それとも「命は利用されるものではない」という倫理的な理想を守るかが、生命倫理の大きな分岐点となる。

結論

この小論文では、自身の生命倫理観に基づき、与えられた事例について判断を下すことが求められている。その際、設問に対して適切に理解を示し、論理的かつ独自性のある議論を展開することが高評価につながる。命に関する問題は単純な正解がないため、どのような立場をとるにせよ、一貫した価値判断と説得力ある表現が重要である。